

教育開発支援センター 2011年度 プロジェクト紹介

教育開発支援センターでは、プロジェクト型で教育制度に関する企画立案や教育実践に関する研究を推進しています。今年度進行中の2つのプロジェクト「TSネットワーク」「ICT活用授業の普及活動」をご紹介します。

TSネットワーク

TSネットワークとは、Teaching AssistantとStudent Assistantの頭文字をとって名付けられたプロジェクトです。メンバーは、専任教員1名、事務職員2名、研究員1名で構成されています。本プロジェクトは、平成17年度から試行的に実施している「TAを活用した授業」の実施結果を検証し、教育の質を向上させ、TA制度の実質化を目指すことをその目的としています。具体的には下記の2つの課題を検討することで、プロジェクトの目的を達成することを目指しています。

1) TA制度の実質化

教員へのヒアリング調査、TAへのアンケート及びヒアリング調査によるTAの制度改善、内規策定

2) TAを活用した授業の質向上を目指した取り組み

TA研修の企画・運営、TA通信の発行等

1) TA制度の実質化

2010年度は、TAを活用する教員へのインタビュー調査、TAへのインタビュー、アンケート調査、ならびに過去に実施されたTA制度の報告書

を元に、現在試行的な取り組みとして実施しているTA制度の評価を行いました。そして、今年度は調査結果を元に、TA制度を実質化させるための制度を設計していくことを検討しています。

2) TAを活用した授業の質向上を目指した取り組み

TAは日々の業務や業務に対するアドバイスを教員から受け、TAとして成長している姿が見受けられましたが、それぞれが培ってきた知を共有する場が十分にありませんでした。そこで、2010年度からTA研修を実施しました。研修ではTAが授業を通じて導き出した工夫や改善策を共有し、TAが自己の活動をふりかえり、さらに質の高い活動を実施していくための機会とするようにデザインしています。

また、TAが参加した効果的な授業実践をより多くの先生、TA、受講生に知っていただくために、TA通信の発行を始めました。TA通信では毎月一人のTAがTA活動を通じて学んだことや学習効果が高いと感じたツールや取り組みについて紹介しています。ぜひご覧ください。

(<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/outline/ta05.html>)

(教育推進部 岩崎千晶)

ICT活用授業の普及活動

eラーニング/eポートフォリオ活用推進ワーキンググループによる昨年末のICT活用授業の実態を踏まえると、教員のICT活用度及びICTリテラシー・レベルはまだ発展途上であると言えます。本学のように学生数も多く、どうしても多人数教室での授業が多くなってしまう状況では、ICTを活用することで授業の効率化を図り、教員・学生間のフェイス・ツー・フェイスのコミュニケーションやフィードバックが必要な部分に出来る限り時間を割り当てられるような工夫が必要です。また、ICTを活用することで、学生同士のコミュニケーションの機会も増えてきます。

そこで、本年度より3年間をかけて、本学の多人数授業形態を反映した授業効率及び授業運営効率を向上させるための工夫を共有・共感していただくことを意図し、最先端のICTを活用した授業のショーケース・モデルを作成し、山本と岩崎の両名がICT活用型授業のコンシェルジュとして以下のICT活用型授業の普及活動を行っていきます。

なお、ここでいう「ICT」とは、教育の効率化を目指した最先端のITおよびシステムすべてを指すものとします。

【授業におけるICT活用の普及についての活動内容(構想)】

1. ICTリテラシー基準および自己評価尺度の作成
2. 授業でのコミュニケーションをスムーズに行うためのICT活用ワークショップ・講習会の開催
3. ICT活用事例と成果の可視化を示したニュースレター・ICT活用カードの作成・配布
4. ICTツール各種の簡易利用マニュアルの作成・配布
5. 教材コンテンツ作成のためのアドバイス
6. ICT活用授業のコンシェルジュ

【お知らせ】

まず、教室内でのグループ活動で役に立つツール(「ライティング・シート」および「クリッカー」)を活用した学生参加型のインタラクティブ授業についてワークショップを計画中です。

(教育推進部 山本敏幸)

From センター長

隣のFDは赤い!?

「隣の花は赤い」ということわざがある。同じ用法のことわざ「隣の芝生は青い」がある。このことわざの意とするところは、みなさんご存知のように「他人のものは自分のものよりよく見えて、羨ましい」である。「自分のものよりよく見える」という点がこのことわざの肝とでもいえるべき部分であろう。

昨今、FD関連の行事がますます活発に開催されるようになった。立場上、他大学等のFDに関する取り組みをテーマにした講演

会や発表会に参加する機会が多いのだが、やはり、参加すると他の大学の取り組みは非常に効果的で、成果が上がっているように見え、思わず大学に持ち帰って実践したくなる。しかし、帰校して冷静に検討してみると、本学で既に取り組んでいるものと大差ない場合や、報告した大学との規模や体制が明らかに異なっており実践困難な場合もかなり多い。どうも隣のFDは赤いようである。

「隣のFDは赤い」。この落とし穴にはつ

つい陥りやすく、しかし、一度陥って実践を始めてしまっただけでこのことに気づいても遅いのである。走り出してしまった取り組みをとどめることは困難が付きまとう。

FDを行う組織は往々にして、組織が求められている使命の性格上、新規性のある取り組みの実践を求めてしまう傾向にある。果敢に挑戦し続けることも必要ではあるが、「隣のFDは赤い」を心に留め置くことも必要ではないだろうか。

教育開発支援センター長
化学生命工学部教授 池田 勝彦

46年前の“SCIENCE”

教育開発支援センター 副センター長
教育推進部 教授 三浦 真琴

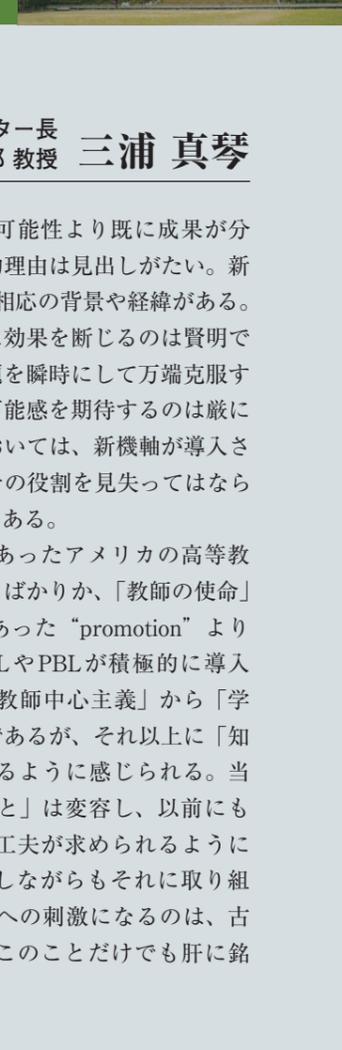
「教師は一体何のためにいるのですか」。今から2年前、教育GP審査員の一人から受けた質問である。LA(Learning Assistant)についての説明を求められた際に、PBL型の授業科目においてラーニングモデル・ファシリテーター・メッセンジャーとして活動するのがその主たる役割であると応じたところ、それでは教師がすべきことがないではないかと問われた。幸い、この応答は大過なく済み、申請したGPは採択されることになったが、同様の問いかけを何処かで見た覚えがあるなど、しばらく頭から離れなかった。

科学史に関心があるので、かつては“SCIENCE”や“NATURE”の記事や論文を拾い読みしていた。もしやと探してみると、それは1965年のSCIENCEにあった(“What are Professors For?”, 18 June 1965, Vol. 148, No. 3677, p.1545)。大学の講義に映像装置や最新機器が導入され、教育の方法や形態に新しい変化が見られようになった頃である。その技術に依存して、あるいは操作や活用に精通・熟練することに心や時間を奪われて、学生との人間的接触が稀薄になるとの懸念がそこには表明されている。発行年や巻・号数をうっかり失念してしまったが、LL教育についても同趣のエッセイが寄せられていたと記憶している。

いったい、いつの世でも新しい試みには批判が付きものである。なるほどそこには未経験ゆえの難題に遭遇する危険あるこ

とはこれを否定できないが、新しい可能性より既に成果が分かっている旧套に軍配を上げる積極的理由は見出しがたい。新機軸が開発され、導入されるにはそれ相応の背景や経緯がある。それを等閑視し、あるいはすぐさまに効果を断じるのは賢明ではない。とはいえ、それは積年の課題を瞬時にして万端克服するものではないから、そこに安易な万能感を期待するのは厳に慎むべきである。殊に教育の世界においては、新機軸が導入されたとして、人間である教師なればこそその役割を見失ってはならない。先述のエッセイの要諦はそこにある。

しかしながら、かかる批判が常であったアメリカの高等教育界では、次々に新機軸が採用されるばかりか、「教師の使命」観が変わりつつある。久しく人気のあった“promotion”より“facilitation”が役割と捉えられ、IBLやPBLが積極的に導入されている。そこに見られるのは「教師中心主義」から「学生中心主義」へのパラダイムシフトであるが、それ以上に「知の転移」という営みからの脱皮であるように感じられる。当然のことながら「教師のすべきこと」は変容し、以前にもまして、そして以前とは異なる創意工夫が求められるようになってきた。とはいうものの、模索しながらもそれに取り組もうとする教師の姿こそが学生の知への刺激になるのは、古今東西の別を問わないはずである。このことだけでも肝に銘じておきたい。



フォーラム・セミナー報告

TA研修を開催しました

2011年3月28日に第3回TA研修を開催しました。春学期に活動するTA43名のうち、31名が研修に参加しました。TAを活用する先生も1名参加いただきました。

今回の研修は、2部構成で実施しました。第1部は、今学期にはじめてTAとなる新人TAのみの研修、第2部は新人TAとTA経験がある継続TAを交えた研修としました。

第1部では、関西大学教育開発支援センターにおけるTAがどのような活動をしているのかを把握すること、高等教育における政策動向について理解すること、そしてTAの基本的な業務態度や事務的な手続きについて確認することを目的としました。

まずは、TAの活動内容を知るために、新人TAが担当科目や活動内容を紹介していただくことにしました。これにより、理系文系問わず、全学部から多様な職種がTAに期待されていることを共有しました。

その後、私から「高等教育の政策動向」についてミニレクチャーをおこないました。文部科学省の取り組み、アウトカム評価、本学のFDの原点について説明を加えた後、TAに求められている力について検討をしました。そしてその力を培うために、「日々の業務に対するアドバイスを教員から受けること」、「TA活動を省察し、授業方法や学生との接し方などTA活動の改善策を自分なりに実践すること」、「他のTAの活動を参考に、自らの活動を省察すること」について話

をしました。

第2部では、新人TAと継続TAが交流することで、TA同士で学び合う場を設けました。まずはミニレクチャーとして、私から、高等教育における授業改善の手立てとして、授業研究や授業コンサルテーションを紹介し、教員は反省的実践家であることやコミュニティを形成して授業の質を上げることなどについて話しました。

その後、TAはグループに分かれ、ダイアログを行いました。今回のダイアログのテーマは「TA活動の質を上げるために、教員とのやり取りにおける工夫・課題を共有すること」としました。前回の研修では、「各活動におけるやり取りや課題を共有すること」を目的としたため、今回は教員とのやり取りに焦点をあてました。まずは、それぞれの活動内容について紹介しあい、TA活動を円滑に進めるための教員とのやり取りについて意見を交換しました。その後、グループで話し合った内容を全体に報告しました。

TAからは、「次の授業でどうするかを授業前の時間を使って確認する」など、教員とTAが授業前や後に話し合うことの重要性が指摘されました。一方で、「先生が授業をどう進めるのか、その際、TAにどのような仕事を求めているのかをお互いに理解することができていれば、そこまで密接に連絡を取り合う必要はないのではないか。」との意見も寄せられました。教員とのやり取りは、継続



グループワークにおける発表

年数、活動内容、教員との関係性により変化するため、TAは自分にとってどの程度のやり取りが必要なのかを確認しておく必要性が示されました。ほかに、「担任の先生に何らかの提案をする機会はあるのか」という新人TAによる投げかけに対して、継続TAが「些細なことでも提案を聞き入れてくれる。教員がそういう機会を与えてくれるので、やってみたらどうか。」との意見が寄せられました。

また、他のTAと話し合うことで「継続して同じ活動を担当しているが、自分は新しい活動ができていないのではないか?と少し反省した。新しいことができるように考えておいた方がいいのではないか」と述べたTAがいるなど、他のTAとの意見を交換したことによって自分の活動を反省的にふりかえる様子が見受けられました。

先生方からTA制度に関するご意見・ご提案をお待ちしています! 連絡は、ciwasaki@kansai-u.ac.jpまでお願いします。

(教育推進部 岩崎千晶)

FD Café を開催しました

4月23日(土)、「FD Café」(新任教員研修会)を開催しました。新年度開始早々の忙しい時期でありましたが、24名の参加を得ました。昨年度は授業開始前(4月3日)に開店しましたが、今年度は新任教員での授業を数回経てからの方が対話の内容にリアリティが増すと考えました。

その他のMENUは昨年度とほぼ同じです。アイスブレイクを兼ねたグルーピングとミラーリングを用いた自己紹介を皮切りに、それぞれのグループが対話を重ね、それを次



昨年のalumniとともに展開されるFD Café②

第に他のグループと共有していく「World Café」へ展開していきました。

各グループから示されたダイアログの内容(ダイジェスト)をここに全て掲載することはできませんので、当日、白板上に示されたMind mapの一部だけをキーワードにて紹介することにします。学生の印象としては、「真面目」「素直で社交的」「積極的」「距離が近い」「高い社交性」といった好意的なものもあれば、「学力差」「関心のなさ」「基礎体力不足の大学生」などの問題点を指摘されました。あるいは「学生の多様性を活かす授業」「学生との距離を縮める授業」「インタラクティブな授業展開のためのミニツペーパーの利用」といった授業作りに関するものもあれば、「私語を少なくする工夫」などの課題・問題点についての言及もありました。

昨年と同様、それぞれについての結論を得ることがCaféの目的ではありません。教師



昨年のalumniとともに展開されるFD Café①

が意見や情報を交換することによって、共通するテーマや課題を発見あるいは発掘し、それに関する知見やアイデアを創出・共有することの意味や価値を実感あるいは予感すること、それが本Caféのねらいです。そのねらいを知る昨年の参加者がalumniとして駆けつけてくださいました。時間に限りがあったため、存分にはご活躍いただけませんでした。こうやって少しずつ「土づくり」の輪が広がっていくことを心より願っています。昨年同様、Summer Caféの開催を予定しています。今回、ゆえあって参加できなかった方々も、どうぞ奮ってご参加ください。

(教育推進部 三浦真琴)

LA (Learning Assistant) がポスターセッションで取組の紹介を行いました

5月21日に京都大学「関西地区FD連絡協議会総会ポスターセッション」にてLA(初年次教育を支援する学生スタッフ)が自身の取組について発表しました。ポスターセッションへの参加は昨年に引き続き2回目です。発表の準備から当日の説明まで、LAの有志が中心となり行いました。来場者からは昨年同様「LA自身の体験について伺え大変参考になった」等、好評の声を頂きました。今回は、ポスターセッションを終えての感想をいくつか紹介します。彼ら、彼女らの感想からLAの成長や意識、行動の変容を感じ取ることが出来るはずです。

(教育開発支援センター事務局)

【文学部2回生 中島真麻】

当日を迎えるまで、まだLAを始めて2ヶ月のわたしは、内容を聞きながらも、自分にどんなことができるのだろうと不安に思うばかりでした。しかし実際ポスター発表が始まると、もうやるしかありません。関大のポスターに目を留めてくださった他大学の教職員の方に声をかけると、自分なりのつたない説明でも優しく耳を傾けて聞いてくださり、「今後の参考にします。」といった感想をいただきました。

ポスター発表を終えた情報交換会の場でも、その場にいたLAの皆さんが、誰かしら教職員の方に声をかけていて、ただただすごいと思うばかりでした。その時、偶然近くにいた教職員の方と目が合い、まだ関大のポスターを見られていなかったこともあって説明させていただくことになりました。その方は本当に熱心に私の説明を聞いてくださりました。更にLA活動にとっても興味をもってくださり、「ぜひ見学したい」とさえ言ってくださいました。

そのような私の行動を教育推進部の方や他のLAの方に評価していただいたことは、少し自分の自信にも繋がりました。LA活動を自分自身で説明したことで、この活動がより画期的なものであることを改めて感じました。こういった、貴重な経験を得る機会を与えてくださった教育推進部の方に、深く感謝しています。

【政策創造学部3回生 國谷みなみ】

京大で行われたポスターセッションに参加して、私は二つのものを得ることが出来ました。

まず1つ目は、他の授業のLAとの交流です。同じ授業に入らなければ、他のLAと一緒に活動する機会はありませんので、このような課外活動で、とても貴重でした。学年も学部も違う学生と仲良くなれて良かったです。また、今回の発表で初めて話す相手もいて、LAの輪が少し広がったなあと思いました。

2つ目は、LAとしての自覚です。他大学の人にLAの業務内容について説明することが求められていたので、まずは自分自身が理解しておく必要がありました。私はLAの役割について、雰囲気ではしか理解できていなかったもので、文字にしたり、口に出すことで、理解が深まりました。発表では、初めの方は緊張して、先生に頼ってしまいましたが、他のLAが懸命に説明しているところを見て勇気が出ました。そのあとは積極的にお話が出来ました。他大学の教員の方とお話して、自信もつきましたし、LAに関心を持ってくださった方も多数いらっしゃり、嬉しく感じました。

今回の活動はとても有意義でした。参加させて頂けたことに、とても感謝しています。

Learning Assistant

LA活動報告



ポスター発表に参加したLAと教職員

【文学部2回生 牧野晃大】

TIPSを作っている時、他大学の教員に説明する時、私は「授業支援をしている自分」とは別の位置に身を置いていました。そこからは「LAとは何か」「どんな悩みがあるのか」などLAを客観的に見直すことができました。今回の発表は、改めてLAを、自分を見つめ直す機会でもありました。

TIPSはとてもよいものに仕上がったと思います。最初は経験の浅い私にできるだろうか…と不安でした。しかし他のLAのリフレクションペーパーを読み、同感する所も多く、皆失敗や悩みを繰り返しながら業務にあたっているのだな、と知りました。発表を通し、LAとして成長できたと感じます。自分のできること、やるべきことを踏まえ、これからの業務に活かしたいと思います。

【社会学部3回生 堀尾裕一】

この協議会に参加させていただき、LAの業務に対する理解の深まり、そしてLA同士情報共有と関係性向上、そして大学教員、職員の方とのコミュニケーションをする経験を得ることができました。多くの大学教育関係者の人々に自分たちのしていることを話すために、本学のスタッフがこのLAでなそうとしていたことを聞いたり、日々LAの仲間が書いているリフレクションペーパーをみたりすることで、活動内容がより明確になりました。またその間、同じLAの仲間とTIPS集を作り、幅広い話を共有し、その間のメンバーのあり方や姿勢から学びが多くありました。また大学教員の方とワインを飲みながら音響や生物学、評価法の話から大学生活の話まで幅広く話せることができましたのはとても良い経験であり、先生方が授業の中で話されている理論にさらに興味が増しました。

LAが作成したポスター



LA (Learning Assistant) に関するお問い合わせは教育開発支援センターまで